

(資料)

REFRANERO ESPAÑOL (29)

スペインの諺辞典

Bernardo Villasan^{*}(ed.)

新 井 藍 子^{**}

1155. No los que poco tienen son pobres, mas los que mucho desean.

ほとんど持たない者が 貧しいのではなく
たくさん欲しがる者が 貧しいのである

- 持っているものに決して満足できず、いつでももっと欲しがる強欲な者が貧しいということ。
- 同義の諺には “Nada tiene el que nada le basta. 満足しない者は、何にも持っていないのと同じ” (筆者の諺辞典, 諺 1020 を参照), “Ninguna cosa hace pobre al avariento sino lo riqueza. 強欲な者を貧しくするのは、財宝だけである” (同辞典, 諺 1045 を参照) などが、また、異表現には “No es pobre el que tiene poco, sino el que codicia mucho. ほとんど持たない者が、貧しいのではなく、たくさん欲しがる者が、貧しいのである” (同辞典, 諺 1092 を参照) がある。
- 例題: セレスティーナ第 1 幕, どんなあこぎなやり方であろうともたくさん金が欲しいというセレスティーナに向かってカリストの従者が言う, “Y aún más te digo, que no los que poco tienen son pobres; mas los que mucho desean. さらに言っ

^{*} Edición y revisión. Facultad de Humanidades. Universidad de Fukuoka.

^{**} Profesora de español en la Universidad de Fukuoka (Facultad de Humanidades).

ておくが、ほとんど持たない者が貧しいのじゃない、うんと沢山欲しい者が貧しいとね。”（魔女セレスティナ、大島正訳）

- 類義の日本の諺には“長者富に飽かず”がある。

1156. No ocupa más pies de tierra el cuerpo del Papa que el del sacristán.

法王様のからだも 小坊主のからだも 占める広さは同じ

- 人間は、皆本質的には同じようなものであるの意。（スバルビィ）
- 例題：ドン・キホーテ，第二部 33 章，公爵夫人から島の統治を危ぶまれているサンチョがいくつもの諺を用いて，人間は皆同じであると言う，“...y no ocupa más pies de tierra el cuerpo del Papa que el del sacristán, aunque sea más alto el uno que el otro ; que el entrar en el hoyo todos nos ajustamos y encogemos, ... 法王様のからだも 聖器番のからだも，よしんば背丈にちがいはあろうと，占める広さに変わりはない。というのはね，穴にへえる時，だれでもみんな場所にあわせてからだをちぢめるからで，…”（続編二，永田寛定訳）注：“hoyo-穴”は，墓のことで，スペインでは，現在でも土葬である。死んで葬られる時には，墓を占める広さは誰でもだいたい同じであると言っている。—筆者
- “sacristán”とは，“教会のミサで司祭の侍者を務める者で聖器具の管理及び清浄，香部屋とか教会内部の清掃などもする。”
- 標題のスペインの諺は，死んでしまえば人間は皆同じであるから，生きている時に少々金を持っていたり，自分は偉いと威張っていたりしても虚しい，つまらないというニュアンスがある。類義でこちらでよく使われているのが“五十歩百歩”（孟子），“大同小異”などである，多少の違いはあっても，似たり寄りたりで本質的には同じようなものであるという意。

1157. No pidáis cerezas al cardo, que nunca las ha llevado.

カルドンにサクランボを求めるな 一度も実をつけたことがないから

- 不可能なことを望むことをたとえている。“Pedir peras al olmo. 榆^{にれ}に梨を求める”（筆者の諺辞典，諺 1279 を参照）と同義の諺。“cardo-カルドン”は，“地中海地方

産キク科の草で、葉と葉柄はあく抜きして食用にする。”

- 同義でこちらでもよく使われているのは、“木に縁^よりて魚^{うお}を求む”（孟子一木に登って魚を探す意），“畠に蛤山に蛤を求む”，“水中に火を求む”などである。

1158. No pone la gallina del gallo, sino del papo.

メンドリは オンドリによってではなく 餌袋^{えぶくろ}によって 卵を生む

- 餌をたくさん食べればたくさん卵を生むということ。メンドリはつがったほうが卵をよく生むが、時にはオンドリなしでも卵を生む。（コレアス）餌が充分に与えられているメンドリはよく卵を生む。（パロス）
- 日本の諺でいえば、“色気より食い気”（色欲より、食欲を満たすほうが先），“花より団子”（風流より実利のほうを取ることのたとえ）などであろうか。標題のスペインの諺のコメントは単に事実をそのまま述べているが、今風にたとえると、女は、男なしでも収入が充分にあれば子供をたくさん育てられるシングルマザーになれるということ。

1159. No ponga al fuego su olla vacía nadie con esperanza de que el vecino se la proveerá de carne.

隣人が肉を持ってくるのを期待して 空っぽの鍋を 火にかけるな

- 自分の利益は、自分が気かけなければならぬ、他人を当てにすべきではないということ。（パロス）
- 類義の諺には “No pidas de mano ajena, si la tuya no va llena. 他人の手を借りるな、もし自分の手がいっぱいじゃなかったら”（他人が親切な行為をしてくれたら、こちらもお返しをしななければならない—パロス）注：“si la tuya no va llena-もし、自分の手にいっぱい物、或は金を持っていなかったら”一筆者
- 何事につけ人を当てにするなということ。類義の日本の諺には、自分だけに都合のよい期待事は、思い通りにはいかないという意の諺 “当て事は向こうから外れる”がある。

1160. No por mucho madrugar amanece más temprano.

いくら早く起きても 早く夜は明けぬ

- あまりにも極端な用心をしても、欲するような成果が得られないことがしばしばある

ものである。(パロス) 前もって用事のかたづけてしまおうといくら早くしても、いつも望んでいるような結果が得られるとは限らない。(スバルビィ) 異表現がスバルビィ 諺辞典に次のように見られる; “No por mucho madrugar amanece más temprano, o más aína. 同訳”

- イリバレン (格言の背景) によると, “この諺は, 1541 年の諺集 (Cartas en refranes, Blasco de Garay) には, <Por mucho madrugar no amanece más aína. 同訳>が見られ, その後には, <No por mucho madrugar amanece más aína. 同訳>と, 少し変わっている, そして, 19 世紀には <Por mucho madrugar no amanece más presto. 同訳 (Las mil y una barbaridades, Pedro-Felipe Monlau)>と変化し, 現在では見出しに見られるような形になっている。Pedro-Felipe Monlau は, この諺に次のような解釈をしている; <これは寝坊が言う諺であるが, 普通に起きて仕事をすると一日っきりでであるが, 早起きする者は, 一日と半分をゆっくり享受できる, その反対に遅く起きた者は, 一日中急いで仕事をしなければならぬ。>”
- 例題: セレスティーナ, 第 14 幕, 恋するメリベアと逢い引きをしたその夜に, もう次ぎの夜が待ちどおしいカリストにはゆっくりと時計が動くように感じられる, “¿Qué me aprovecha a mí me dé doce horas el reloj de hierro, si no las ha dado el del cielo? Pues, por mucho que madrugue, no amanece más aína. 天上の時計が十二時打たなかったら, 鉄の時計が十二時打とうとも, それがしにはなんの役に立とうか?いくらそれがしが早起きしようが, 夜明けが早くなることはないのだ。” (魔女セレスティーナ, 大島正訳)
- 用心のし過ぎを諷う諺には “塩辛を食おうとて水を飲む” (手回しがよすぎて役に立たない), “夕立のせぬ先に下駄はいて歩く”, “暮れぬ先の提灯” などがある, 結局, “過ぎたるは猶及ばざるが如し” (論語) で, 物事には程度というものがあり, 程度を超えたものは, 足りないのと同じであるということだろうか。

1161. No puede el hombre huir la fortuna que le ha de venir.

人は 己の運命から 逃れることはできない

- 人というものは, 変えることが出来ぬ定められた宿命によって導かれていくという一種の運命論的な諺。(パロス)
- こういう考え方は日本にも昔からある, ぴったり同じ諺には “運は天にあり” (人の

運は天が決めることだから、人の力では変えられない。最善を尽くした後は天に任せるほかはない)、“運を天に任せる”、“運は天にあり牡丹餅は棚にあり”などがある。ただ何もしないで運を天に任せるのではなく、最大の努力はしなければならない、その結果は天が決めるということだろう。おうおうにしてわれわれが何らかの成功を取ることができるのも他者の好意、援助によることが多い、そういう他者と巡り会うことが出来るのも運である。

1162. No puede gozar lo suyo cierto el que pena por lo ajeno.

他人のものを欲しがめる者は 自分の持っているものを 喜ぶことができない

- 羨ましがり屋と野心家を咎めている諺。(パロス)
- いつも他人のものが良く見えてうらやましいので、自分が所持しているものはつまらなく思え、それを楽しむどころか粗末にさえ扱う。物質的な物だけではなく、嫉妬深いものは隣人の地位、仕事、夫、妻、息子たちなどあらゆることに嫉妬する。ここでよく用いられる同義の諺には“隣の芝生は青く見える”、“内の米の飯より隣の麦飯”(他人のものならどんなつまらないものでもうらやましい)、“隣の花は赤い”、“隣の牡丹餅は大きく見える”、“他人の飯は白い”などがある。

1163. No puede haber gracia donde no hay discreción.

分別のない機知は 機知とはならない

- 何の考えもなく不用意に、冗談を言い放つ愚か者を咎めている。(スバルビィ)
- この諺に用いられている語句“discreción-分別、思慮深さ、慎み、機知、機転 etc.”と“gracia-面白さ、おかしさ、優美、冗談、恩恵 etc.”は、セルバンテスの本、特に<ドン・キホーテ>の中で重要なキーワードとなっている。室井光広“セルバンテスのキーワード”(＜ドン・キホーテ＞私注、群像 2004-11-1)を要約すると次のようになる；“<discreción>は、<形容詞 discreto>と共に、セルバンテス的な、あまりにセルバンテス的なキーワードである。ある研究者の調べによると、<ドン・キホーテ>の中に百五十一回使用されている。これはいろいろな意味をあらわす多義語であるから、一つの訳語でそのニュアンスを表現するのはとても難しい。<ドン・キホーテ>に頻出するキーワードとしては他に、<gracia>と<形容詞 gracioso-愉

快な、滑稽な、素敵な>がある。ボルヘス（伝奇集，岩波文庫）は、<ドン・キホーテ>は、何よりもまず愉快的な（agradable, gracioso）本だと語った。この愉快さは、ルネッサンス文学の共通要素としての陽気さと直結しているが、セルバンテスの場合にはそれらの共通要素は、彼固有の寛容なく慎み深さ－discreto>によって一種の抑制がかけられている。”次に上げた例題を見ても分かるように、セルバンテスにとって見出しの諺のおしえは文学上の重要な表現手段であった。<ドン・キホーテ>は、アイロニー付きのユーモア（ナボコフによると、このユーモアは、一種悲愴で、残忍冷酷である）で満ち満ちているが、それは<discreción-分別>によって抑制されたユーモアであり愉快さであるということが言えるだろう。<ドン・キホーテ>の中には数多くの諺が用いられているが、セルバンテスがそれらから人生上のおしえだけではなく、文学的要素をも学んでいたことが分かる。注：ナボコフとは、ウラジーミル・ナボコフ<ナボコフのドン・キホーテ講義>一室井光広<ドン・キホーテ>私注，群像，2004-11-1

- 例題：ドン・キホーテ，第二部44章，島の統治に赴くサンチョの引き回し役は，“... era un mayordomo del duque, muy discreto y muy gracioso —que no puede haber gracia donde no hay discreción—, ... 公爵の執事のひとりで，甚だ気がきき甚だ愛想のいい男であった。というのも，気がきかないで愛想がいいなんてのはありっこないからだだが，...”（統編二，永田寛定訳）

1164. No puede ser más negro que sus alas el cuervo.

カラスは 自分の羽より黒くは ならない

- 人間の持って生まれた悪の本質は，環境によってそれ以上悪くなることはない。（パロス）直面している事態が，すでに最悪な状態になってしまっているからには，それ以上の悪化を恐れる必要はない。（スバルビィ）
- コレアス諺集には，上記の表現とともに次のような異表現が見られる；“No puede ser de negro más que sus alas el cuervo. 同訳”，“No puede ser más negro el cuervo que sus alas. 同訳”
- 同義の諺には“上知と下愚とは移らず”（論語）がある。生まれながらの聡明な者，または愚かな者は，その後環境を変え，教育してもその本質は変わらないことをいう。（故事，ことわざ活用辞典）スペインの諺では，悪の本質は変わらないと言って

いる。また、英才や偉人は、子供のころから優れていることをたとえて“梅檀は双葉より芳し”^{かんぼ}と言う。その他にも“囓む馬は死ぬまで囓む”，“三つ子の魂百まで”などの諺がある。

1165. No puede todo ser : dormir y guardar las eras.

何もかも同時にできない：眠ったり 脱穀したり

- 全く反対の二つの事柄を同時にすることは出来ない。(パロス) 一度にいろいろなことをするのは無理であるということ。
- コレアス諺集には、異表現で“*No puedo dormir y guardar las eras.* わたしは、同時に眠ることと脱穀することは出来ない”が見られ、また、同義の諺“*No puede uno servir bien a dos amos, y contentarlos a entrambos.* 一人で二人の主人によく仕えることは出来ない、ましてや二人を満足させるのは無理”(この諺の典拠は、新約聖書、マタイによる福音書6-24による；“*Nadie puede servir a dos amos, porque odiará a uno y querrá al otro, o será fiel a uno y despreciará al otro. No se puede servir a Dios y a las riquezas.* だれも、二人の主人に仕えることはできない。一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。”)“*No puedo ser abad y ballestero.* 大将役と石弓の射手役をひとりでこなすのは無理”などが収載されている。
- パロス諺集には、同義の諺“*No se puede repicar y estar (andar) en la procesión.* 行列で鐘の鳴らし役と参列役をひとりでこなすのは無理”，“*Soplar y sorber no puede ser./ No se puede hacer a la par sorber y soplar.* 息を吹くのと同時に吸い込むのは無理”，“*No se puede servir a dos señores a un tiempo y tener a cada uno contento.* 一人で同時に二人の主人に仕えることは出来ない、ましてや二人とも満足させるのは無理”などが収載されている。
- 同時に二つの仕事をすることはできないをたとえて、日本では“二足の草鞋は履けぬ”という。これは江戸時代に、博徒が、同じ博徒を取り締まる十手持ちを兼ねることを“二足の草鞋を履く”と言ったという。現代では、二つの仕事を行う場合などに単に“二足の草鞋”と短縮形で用いられているようである。

1166. No quieras perder el seso por tu vecino necio.

隣の愚か者のために がかかするな

- 直接関わりのない事柄には、でしゃばるなど教えている。(パロス)
- コレアス諺集には、異表現で “No quieras perder el juicio por el necio de tu vecino; o por el tonto de tu vecino. 隣の愚か者 或は、馬鹿者のために理性を失うな” が収載され、パロス諺集には、同義の諺 “Agua que no has de beber, déjala correr. 飲めない水は、流れるままにせよ” が見られる。
- 頼まれもしないのに余計な口をはさんだり、世話を焼いたりすることをたとえて “人の頭の蠅を追う” という。人のことより自分のことにかまかけよと言いたい時は “人の頭の蠅を追うより己の頭の蠅を追え” が用いられる。また、物事は関係をもたなければ、災いを受けることはないから、余計な口出しはしないほうがよいとおしている諺には “触らぬ神に祟^{たた}りなし”, “触らぬ蜂は刺さぬ”, “近寄る神に罰当たる” などがある。

1167. No quiero, no quiero, pero échamelo en el sombrero.

欲しくないけど せっかくだから ずきんの中に 入れておくれ

- 表向きには欲しくなさそうな顔をしているが、内心では欲しくてたまらない者を言う。(パロス) 欲しくてたまらないのいうわべをつくらって遠慮することをたとえている。
- スバルビィ諺辞典には、異表現で “No quiero, no quiero, mas échamelo en la capilla, o en el capelo, o en el capillo, o en el sombrero. いらぬ, いらぬ, だけど (マント, 僧衣の) フード / (枢機卿の) つばの広い赤い帽子 / 帽子に入れておくれ” が見られる。注: 入れものが、全て宗教関係のずきんなのは、一般民衆にとって、僧侶は強欲であると思われるからである。諺の中には僧侶、教会を批判するものが多数あるのも国民の反感の表れである、特に中世には教会の力が強かった。— 筆者
- 宝典 (コバルピマス) には, “No quiero, no quiero, mas échadmelo en la capilla. いらぬ, いらぬ, だけど (僧衣の) フードに入れておくれ” が収載されている。コバルピマスによると; “本当は欲しいのだが受け取るのに恥じらいを感じる人を指していう, たとえば, 僧侶の場合なら, 誓願或は, 憤みから本来は金を触ってはいけないことになっているので。また, 金には触りたくないが, 欲しい狡猾な者たちは “No

quiero, no quiero, mas echádmelo en la capilla. いらぬ、ただどせっかくだからフードに入れておくれ”と言ってもらうのである。<capilla-僧が被るフード>のことで、初めは、細長いものを指していたが、後に丸いものを指していうようになった。また、別の諺で<非常に少ない>ことを意味する<Esso es meaja en capilla de frayle. それは坊主のフードの中の一銭だ>がある。僧侶は貧しければ貧しいほど気前がよくて、金持ちから寄付された金は、貧乏人と分けあっている。<meaja>とは、カスティージャ地方の古いとても小さな貨幣のこと。

- 例題：ドン・キホーテ，第二部 42 章，いよいよ島の太守になって出発しようとしているサンチョヘドン・キホーテがあれこれと忠告する，そのうちのひとつが，もしやもめになって妻を娶る場合には，“...no la tomes tal que te sirva de anzuelo y de caña de pescar, y del no quiero de tu capilla; おまえにとって釣針や釣竿の役をするような，<いらぬいらぬ，礼拝堂へ>と言わせるような女をめとってはならぬ。”（続編二，永田寛定訳）注 1：<capilla-capucha-ずきん，フード>—Martin de Riquer, de la Real Academia, Volumen II, Don Quijote de la Mancha. 注 2：<いらぬいらぬ，礼拝堂へ>は，托鉢僧のことばとして<いらんぞ，いらん。だが入れときな，わしの帽子か，さいせん箱へ。No quiero, no quiero ; pero échamelo en la capilla o en el capelo, o en el sombrero.>ということわざから採った句。これにちなんだセギディーリャがある，という。

お布施は 坊さん いらぬとさ

わしがお寺の 拝壇へ

あげときなされと，そう言って。（続編二，永田寛定）

- 本当は，欲しくてたまらないのに，うわべをとりつくろって遠慮することをたとえて，こちらでは“猫の魚辞退”，“猫の魚を食わぬ振り”などという，スペインの諺とびったり同じ意味のことわざである。また，実体とはうらはらに，うわべだけはもっともらしい偽善的な行為をすることをたとえた諺“餓鬼の断食”（餓鬼は地獄の空腹亡者だから断食しても意味がない），“乞食の断食”などもある。また，うわべはうまく取り繕ってはいるが，本音がかいまみえることをたとえて“衣の袖から鎧が見える”という，この場合の“衣”は，僧侶の衣ころものことで，その袖口から下に着けている鎧よろいが見え隠れして，それとなく力で押さえ付ける姿勢をちらつかせていることをたとえている。（故事，ことわざ活用辞典）

1168. No sabe bien la cena que se come en mesa ajena.

他人の食卓の夕飯は 美味しくないと

- 他人の親切に甘えていい気になっていると、後でどんな事を頼まれたり、要求されたりするか分らないということ。また、他人の家に世話になるというのは、気苦労が多く辛いものであることのたとえ。
- コレアス諺集には、異表現で “No sabe bien el manjar comido en ajeno lar ; o hogar. 他人の家のごちそうは、美味しくないと” が、また、類義の諺には “El que se convida, fácil es de hartar. ごちそうになる者は、すぐに腹がいっぱいになる” (筆者の諺辞典, 諺 502 を参照), “Para el que se convida, no hay mala comida. ごちそうになる者には、不味い食べ物はない” (筆者の諺辞典, 諺 1262 を参照) などがある。
- 商売とか交渉事などをすすめるために接待するやり方はどこでも行われていることである。“食わせて置いて扱^{さて}と言い” という諺は、ごちそうして恩を着せ、相手に断れない状態にしてからさてと要求を切り出すことをうまく表現している。同義に “旨い物食わず人に油断すな”, “馳走終わらば油断すな” などがある。また、他人の好意で食べさせてもらうのは辛いをたとえて “他人の飯には骨がある” (のどに刺さる骨が入っているようで食べにくい), “他人の飯は強^{こわ}い”, “他人の飯には刺^{とげ}がある” などがある。

1169. No se acuerda la suegra que fue nuera.

姑というものは 嫁だったのを 覚えていない

- 地位などで一段上に昇った者が、以前の仲間の間違い—本人自身が以前犯したことがあり、上手にごまかしていたにちがいない—を厳しく咎めることをたとえている。(スバルビィ) 有利な立場にいる者がその地位を濫用することのたとえ。(パロス)
- 同義の諺には “No se acuerda el cura de cuando fue sacristán. 神父は小坊主だったのを覚えていない” が、また、類義の諺には, “No hay peor cuña que la de la misma madera. 同じ木材のくさびほど、悪いくさびはない” (昔からよく知りつくしている同僚, 身内の者が上司になったり, 敵に回るほど怖いことはない—筆者の諺辞典, 諺 1140 を参照), “No ames a quien amó, ni sirvas a quien sirvió. 愛した

ことのある者を愛するな、仕えたことのある者に仕えるな” (われわれの弱点、欠点をよく知っている者に仕えるのはとても辛い)，“En cuanto fui nuera, nunca tuve buena suegra, y en cuanto fui suegra, nunca tuve buena nuera. わたしが嫁になったら、うちの姑は意地悪だった、わたしが姑になったら、うちの嫁は不出来だった” (筆者の諺辞典、諺 536 を参照) などがある。

- 嫁についての諺が次のようにある；“La nuera rogada es bien recibida en casa. 懇願された嫁は、あたたかく家に迎えらるる”，“La nuera rogada y la olla reposada. 懇願された嫁と少しさまされたナベ料理” (より味がでる) など。
- こちらには、類義で“人は近親によって裏切られる”，“獅子身中の虫” (内部にいて危害を加えたり、恩を仇で返す者のたとえ) などがある。

1170. No seas fiel a quien piensa que eres ladrón.

君を泥棒だと思っている者に 忠実であるなかれ

- われわれを憎み、非難する者に仕え、好意をもっていても意味がない。(パロス)
- スバルビィ諺辞典には、異表現で“No seáis fiel a quien piensa que sois ladrón. 君たちを泥棒と思っている者に、忠実であるなかれ” (相手から悪く思われている者は、その相手に気をつかう意味がない—スバルビィ) が収載されている。
- 日本には、反対に人が自分を憎んだり、非難するのはすべて自分の心がけや行いが悪いからで、自分のことをさしおいて相手をあれこれ言うのは間違いであると、戒めている諺が次のようにある；“仇も情けも我が身より出る”，“爾^{なんじ}に出ずるものは爾に返る” (孟子)，“身から出た錆” など、仏教思想から出た諺が多い。良いことも悪いこともすべて、自分が招いた結果であると教えている。